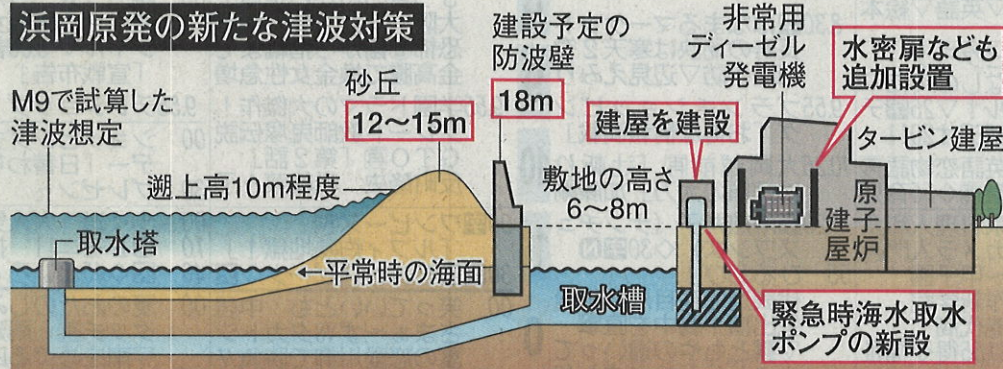


防波壁 18mでも疑問

浜岡原発の新たな津波対策



福島第1原発事故と浜岡原発の津波対策

福島で起きた事態	中電の対策	識者の見方
マグニチュード(M)9の地震で想定3倍近い15m程度の津波が遡上	初めてM9の地震による津波が遡上する高さを10m程度と試算 海拔18mの防波壁を建設し砂丘も12m以上にかさ上げ	津波は6~7mの高さで、遡上すれば高さはその2~4倍にも 防波壁だけでなく、砂丘の管理や強化が望ましい
建屋内が浸水し、非常用ディーゼル発電機など全電源を喪失。冷却機能を失う	原子炉建屋の防水扉を二重化、建屋内でも重要な部屋に水密扉を追加設置	地震により防水扉が損傷しないことが前提で、機能するかチェックが必要

強風 砂丘のもろさ心配

中部電力浜岡原発(静岡県御前崎市)が停止したまま、夏が過ぎていく。このまま乗り切れば「脱原発」の機運はより高まる。中電は今年中にも、福島第一原発の事故を受けた「津波対策」工事に着手し、再来年以降の再開に執着心を見せる。福島の事故は「想定外」の怖さを思い知らせた。浜岡の津波対策を識者と検証した。

浜岡原発 津波対策を検証



海岸線に高さ18mの防波壁を建設する予定の中部電力浜岡原発。砂丘は植栽され、緑の壁となっている。静岡県御前崎市で、本社へ「まなづる」から

中電は、もともと海側にある十、十五層の強度は?

強度は?

砂丘で「津波は防げる」との見解だった。福島の事故を受け、十二層超の防波壁を新設すると公表。七月下旬に打ち出した追加対策では高さを十八層に引き上げた。

福島を襲った津波が十四、五層に達したことに合わせた。中電は十八層の根拠を「さらに余裕を持たせた」と説明する。砂丘も、すべての場所十二層以上となるよう、低い部分に盛り土をする。砂丘周辺に防波壁を建設しても堅固と言えるのか。

津波増幅

波にのまれ、砂丘が役に立たなくなる可能性がある。砂丘より海側に一つ防波壁を造るか、コンクリートで砂丘を護岸化した方が安心」と話す。

中電の計画は、砂丘の下にある岩盤に鉄筋コンクリートの基礎を打ち付ける。その基礎の上に建設する壁は厚さ二層。「小型船舶がぶつかっても、壊れない強度」という。柴山知也・早稲田大学教授(海岸工学)も「海岸では見たこともない構造体。津波で壊れることはないだろう」と強度を保証する。それでも「大丈夫かと言われると、言い切れない」。

浜岡周辺に吹き付ける強風で、砂が飛ばされ、砂丘がもろくなる恐れを指摘する。「津波は、東海地震が、東日本大震災と同じマグニチュード(M)9だったと仮定した場合、遡上高を「十層程度」と試算した。今回の震災を受け、従来より二層ほど高くなっている。中電は、東海地震が、東日本大震災と同じマグニチュード(M)9だったと仮定した場合、遡上高を「十層程度」と試算した。今回の震災を受け、従来より二層ほど高くなっている。

津波遡上高 試算超える恐れ

たからだ。中電の想定も、この事実を試算に加えている。

震災後、津波の高さを以前から引き上げる専門家も続出。古村孝志・東京大教授（地震学）は、具体的な数字の公表に慎重だが、津波の高さは従来の試算の一・五―二倍になった。名古屋大の川崎浩司准教授（海岸工学）の試算では、浜岡原発に押し寄せる高さは六―七メートルの結果が出た。

では遡上高はどのようなか。川崎准教授は「沿岸地形によって変わるが、だいたい津波の高さの二倍から四倍になる」と明かす。仮に四倍とすれば、いくら十八メートルの防波壁でも、越える可能性がないわけではない。

中電は、遡上高を算出する基になっているはずの津波の高さを「遡上高とそれほど違わない」とだけ説明し、数字は公にしていない。遡上高の試算も現時点で国に報告する予定はないという。外部から、工事を検証するのは難しい。